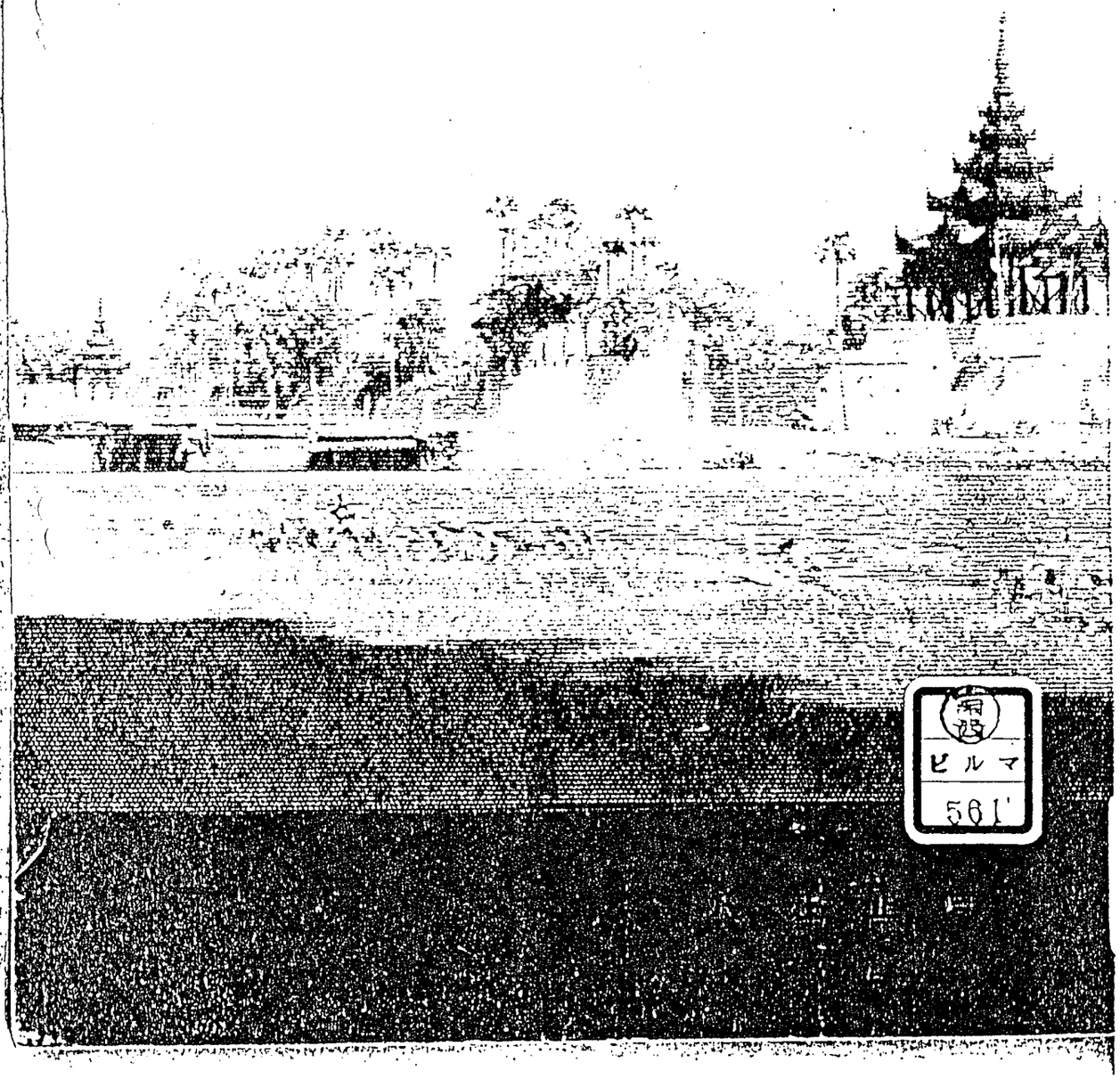
ビルマ戦記

イラワジの堅い



南洋
ビルマ
561

「八江さん、大変でしたね」と枕元に座り、軍帽をとって拝み、「もう二度と御目にかかれないかと心配しました。毎日家族全員で、貴殿の成功を祈っておりました。生きて帰られて、こんな嬉しい事はありません。貴殿は仏余利の加護によって、生かされたのです」と言って、繰返し帽を伏し拝んでベヤベヤーと唱えていた。傷の事を心配して尋ねていたが、生命に別条がない事を知って、安堵の胸をなで、「子供達も、貴殿がいない事を、心細がっておりました。今日もみんなお見舞に来ようとしましたが、舟が小さくて駄目でした。これは娘達が心をこめてつくった御飯です。どうぞ召上って下さい」と、乏しい中から、ととのえた、ビルマ料理を差出し、目の前で食べることを奨めた。私は彼等の愛情をかみしめた。部落で手に入れた鶏を一羽、土産に持っていた。彼は一族の生命をどうして、全うするかについて相談した。私は責任の果せないのを記び、今後は、自由意志により、危険を避けて行動して欲しいと考えを述べた。運命を天に任せるより外に、名案もなかったのである。ウバセイン一家の者も、心配して訪ねて来た。ママも心細いのか、一日中、私の側から離れず慰めてくれた。隊長からも、部下にもそして現地の人々からも、大きな信頼を得ていた私は、傷ついた身体の苦しみを越えて、満ち足りた感情に浸っていた。

戦局は急速に悪化し、市街地も、正面陣地も大半が敵の手に落ちた。正面射撃場陣地の陥落は致命的であった。死傷者は日を追って急増した。フーコン地区で、菊兵団主力を撃破した、新編第一軍の敵主力は、ミチナ攻撃軍に殺到して来た。爆撃機の行動は、愈々猛威をはしいままにした。敵の物量攻撃は、頻死にあえぐミチナ守備隊に、暴風の様にたたきつけられた。抗道による白兵戦も、敵の人海戦術の前には、空しくなった。敵戦車も、大挙フーコンより、進撃して来る事が、時間の問題となった。全員が愈々数日中に玉砕だと覚悟していた。本部へ行くことも出来ないので、戦局の推移は判らないが、戦況は断末魔の様相となった。その頃、軍司令部との間に、どの様な連絡があっていたか、詳らかには、関知しない。方面軍司令部より水上少将に親電がとどいた。遂に万策尽きた事を洞察された水上少将は全責任を一身に背負って、

「小官の不明、この上ミチナを確保すること能わず。最悪の事態に至りたるをお詫びする。負傷者は万難を排し、筏にて、イラワジ河を下航せしむるにつき、バーモにて救援せられ度。丸山大佐以下は、軍旗を奉じ　イラワジ河以東に転進せしめ……」と悲痛な電報を打って、軍司令部の指示を待った。軍司令官は、人徳高い将軍の心境を察し、転進命令が発せられた。平素から、最も強硬に、玉砕を主張していた私は、最後の決定に、立ち合う機会を与えられなかった。

その夜本部に呼ばれた私は、今夜のうちに、患者や、指揮機関の一部と、非戦闘員をなるべく多く、渡河させるという計画を、無念の涙の中で聞いた。本部から、そのまま、河岸に担がれていった。川岸には、半島出身の慰安婦達が、おびえた声でひしめいているのが哀れであった。丸木舟が草叢から引き出され、我々、五、六名は、第一便で、対岸へ渡された。河から見るミチナの街は、照明弾、曳光弾が、夜空を彩って夢の様に美しく、其処で死闘が繰広げられているとは思えなかった。対岸の部落に上陸した